Career Up Stage

よく生徒同士で「これをすると内申が上がる」とか言っています。内申の本当の内容を理解し今後の学校生活に活かしましょう。

内申の本当の意味

内申の内容は？

内申と言っているものの元になっているのは、「生徒指導要録」というものなのです。

「生徒指導要録」の中から、高校入試に必要な項目だけを抜き出して、書き込んだものを「内申書」といっています。

実は、その「内申書」も正式には「調査書」といいます。

まずは、「生徒指導要録」にはどんなことが書かれているのでしょうか。これは、生徒の”戸籍謄本”のようなもので、学校生活のすべてが書き込まれています。

- **○ 生徒の氏名・住所**
- **○ 生徒の保護者・住所**
- **○ 入学前の経歴**
- **○ 学校名及び所在地**
- **○ 生徒の学級・番号・担任・校長氏名**
- **○ 転学等の記録・その理由**
- **○ 進学先・就職先等**
- **○ 各教科の学習の成績**
- **○ 特別の教科　道徳**
- **○ 総合的な学習の時間の記録**
- **○ 特別活動の記録**

（1年～3年までの学級活動・生徒会活動・学校行事への集団生活や生活への関心・意欲・態度、知識・理解、集団や社会の一員としての思考・判断・実践）

- **○ 行動の記録**

（基本的な生活習慣、健康・体力の向上、自主・自律、責任感、創意工夫、思いやり・協力、生命尊重・自然愛護、勤労・奉仕、公正・公平、公共心・公徳心などについての担任の評価）

- **○ 総合所見及び指導上参考となる諸事情**
- **○ 出欠の記録**

こんなにたくさんのことが、「生徒指導要録」に記入されています。もちろんそれは、生徒の学校生活における大事な記録ですが、あくまでも生徒が1年、2年、3年と順調に伸びていくために使われるものです。

調査書と学力検査　どちらが重い

高校受験用の「調査書」は、この「生徒指導要録」をもとにして記入されます。もちろん3年生の担任が記入しますが、1・2年生の時のものもそっくり写されます。

さて、高校入試はもちろん試験がありますが、この試験と内申書といわれている「調査書」はどちらが重く見られるのでしょうか。

県立高校と私立高校によっても違いますし、各都道府県によっても違います。

県内の某私立高校は内申書重視で内申書の成績を1．5倍にしているところもあるようです。

県立高校は一応、**”調査書と学力検査等の成績との比重は、原則として5対5として合否を判定する**”と言われています。ただし、高等学校長が特に必要と認める場合は、4対6から6対4の範囲内の比重とすることができるようです。どのくらい重視するかは、各高校によっても違いますが、その他に面接の成績も合否判定に影響しています。

また、内申書の中の特別活動を重視している高校もあります。つまり、学級や生徒会や学校行事の役割を積極的に果たしている生徒をとりたがる傾向もみられます。

さらに、内申書の中の出席の記録を重視する高校もあります。それは欠席や欠課が多いのを嫌う高校が多くなっているのです。

結局はまじめさ

このように内申書というものは、生徒の学校生活のすべてが記入されています。一日一日の学校生活をきちんとしている人は、そのように記入されていますし、適当に過ごしている人は、そのように記入されています。

これまで、当番活動、係活動、授業などを怠けていた人は、今後まじめにしなければなりません。欠席・欠課・遅刻の多い人は減らさなければなりません。ひねくれていた人は素直にならなければなりません。

そんなことを一つ一つ克服していくことが、3年生にとって、自分の希望する高校進学を完全なものにしていくのです。

生徒総会（5月29日）

学習環境を整える

自分の勉強部屋にこもるより、人の目がある居間で勉強するほうが、成績が伸びるとの話が注目されました。中学生ぐらいまでは、親がある程度、子どもの勉強を管理することも必要となるようです。

また勉強する場所の周囲に、スマホ・テレビ・雑誌など、勉強の集中の妨げになるものを置かないことも留意したいものです。

私も大学受験の勉強で、自分の部屋より、余計なものがない塾の教室や人の目のある図書館のほうが勉強がはかどりました。

娯楽の誘惑の多いこの時代、集中して勉強ができる学習環境を整えることは、成績アップに必要なことであります。

やる気になるには

「アメとムチ」という方法があります。

「ムチ」は、出来ないと強く叱られる、膨大な宿題をやるなどのスパルタ式の教育です。

「アメ」は、「いい点とったら欲しいものを買ってもらえる」といったことで、効果てきめんのこともあります。ベストセラーになった「学力の経済学」でも、ムチを与えるより、こちらを推奨しています。しかし「アメ」も慣れっこになって、当たり前のこととなってしまうと、効果が薄くなってきます。

勉強の動機づけの王道は、人間が本来持っている学びたいという欲求を引き出すことです。

フィンランドでは、自然観察等を通し、子どもたちに科学的なものの見方を養うような教育を行っています。「なぜ？」という疑問を持たせ、その理由や原因をつきとめさせようとする探究活動を行うのです。

子どもたちは、本などを使って調べものをしていくうち、自然と読書の習慣も身につきます。フィンランドでは、数々の指標で世界で高い評価を受けています。